

使用することはさけるべきである。

- 3) ヘパリン添加の有無は数値に影響しない。
- 4) おのおののピーズによって数値が異なる場合もある。
- 5) HBsAg, HBsAb のいずれも high titer の場合、測定者によりその数値は必ずしも一定の値を示さなかった。
- 6) HBsAg, HBsAb が low titer の場合の再現性は極めて高かった。

28. 血中セクレチンのラジオイムノアッセイ測定 の臨床的意義

林 秀晴 中野 哲
綿引 元
(大垣市民病・2内)
鶴田 初男 金森 勇雄
(同・特殊放)

RIA 法で血中セクレチンを測定した。健常人の正常値は 98.4 ± 35.0 pg/ml であり、胆石症、慢性肝炎、急性および慢性膵炎の一部で、高セクレチン血症を認めた。また健常人の10例における1000 Cal の Test meal 摂取前後での血中セクレチンの変動はみられなかった。十二指腸内に $1/10$ N 塩酸 40 ml を注入し、血中のセクレチン、グルカゴン、インスリン、ガストリンの経時的変動をみた。8例の消化器疾患患者の内、急性膵炎治癒後の2例において塩酸注入後5~10分後に血中セクレチンの上昇を認めた。一方、3例の急性膵炎、慢性膵炎増悪期の症例において、早期に血中セクレチン、ガストリンの上昇をみたが、いずれも血清アミラーゼの低下と平行して数日後には著明に低下した。

29. TSH・RIA, PEG 法の試行について

藤田 卓造 加藤 英雄
柴田 靖彦 竹内 憲彦
(名市大・放同元素研究治療)
佐久間貞行
(同・放)

T₃, T₄ は1~2日で結果が出るが、TSH は2抗

体法 (4°C インキュベート) で5~6日を要している。

1971年、ペプチドホルモンに使用が発表され、現在多用されている PEG を TSH の B, F 分離に用いて作業時間の短縮が可能か試みた。

標準 TSH 液、標識抗原、抗体は、第1 RI 製、添加用馬血清、PEG はダイナボット RI 製キットの添付品を使用した。

1) インキュベーション温度と時間は、4°C 24時間では不足で37°C 3時間、室温 20~24時間で使用可能である。

2) 添加馬血清の影響をみるため除蛋白前、後で B/T 値を比較し、約60%と差がなかった。馬血清をインキュベーション前に、添加した時と PEG 添加時に添加した場合と B/T 値を比較したが差が少なく、添加用馬血清が抗原抗体反応に対して影響が少ないと考える。

3) 抗血清を入れない場合の非特異的結合が15~26%と高い。

4) 3種類のプール血清で2抗体法と比較したが著しい低値を示した。

結論として、37°C 3H または室温20~24時間インキュベーションで使用可能となり、作業時間は1~2日と短縮が可能であるが、このままの組合せでは使用できないと考える。

30. グルカゴンのラジオイムノアッセイにおける 基礎的検討

村田 和平 杉山 陽一
(三重大・産婦)
信田 憲行
(同・中放)
中川 毅
(同・放)

glucagon の radioimmunoassay に関して種々の検討を加え新しい方法を樹立した。

B・F 分離法において PEG 法, talc 法, 2抗体法, DCC 法を検討したところ、PEG 法は操作、